

教育研究業績書

2020年10月27日

所属：附属総合ミュージアム

資格：助教

氏名：樋口 温子

研究分野	研究内容のキーワード
服飾史・染織史	きもの・図案・博物館
学位	最終学歴
博士（芸術学）	関西学院大学文学研究科 文化歴史学専攻 美学芸術学領域 博士課程後期課程 単位取得満期退学

教育上の能力に関する事項		
事項	年月日	概要
1 教育方法の実践例		
2 作成した教科書、教材		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室 学芸員（臨時職員）	2017年7月1日～2020年3月31日	毎年の秋季展覧会で、一般市民・学生に向けた30分のギャラリートーク（展示品解説）を実施し、展示への理解を促した。ワークショップの運営や補助にも携わった。
2. 関西学院大学博物館 学芸アシスタント	2015年4月1日～2015年9月30日	博物館実習の授業2クラス（各30名）の補助を行った。
4 その他		
1. 武庫川女子大学附属総合ミュージアム2019年度 登録有形民俗文化財登録記念展「きものに見るモダン生活の軌跡」	2020年2月28日～現在	武庫川女子大学附属総合ミュージアムの「武庫川女子大学近代衣生活資料」が登録有形民俗学文化財に登録されたのを記念した展覧会。資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定、展示の設営、目録の編集、手展示解説の執筆、広報など、展覧会の全般に携わる。
2. かんさい・大学ミュージアム連携プロジェクト ミニ展示「ゴージャスとモダンイズム—船場の美意識探訪、塩野家コレクションとその周辺—」	2019年9月24日～2019年10月18日	かんさい・大学ミュージアム連携の企画のひとつとして、大阪大学学術総合博物館と武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室が連携し、ミニ展示を行った。武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室の学芸員として、資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定、チラシの作成指導、展示の設営など、展覧会の全般に携わる。
3. 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室 2019年度 秋季展覧会「ハレの日のきもの—近代の裾文様—」	2019年9月18日～2019年11月20日	武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室のきもの資料のうち、裾文様の配されたハレ着を特集する展覧会。資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定、展示の設営、図録の編集・執筆、広報、関連シンポジウムの運営、ギャラリートークの実施など、展覧会の全般に携わる。
4. 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室 2018年度 秋季展覧会「粗品？粗品！—時代の空気感を映す—」	2018年10月17日～2018年12月5日	武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室の生活文化資料のうち、戦時中から現代の粗品を取り上げた展覧会。資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定、展示の設営、図録の編集・執筆、広報、関連シンポジウムの運営、ギャラリートークの実施など、展覧会の全般に携わる。
5. 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室 2017年度 秋季展覧会「近現代のきものと暮らし—技術革新の成果と新しい担い手の成立—」	2017年10月18日～2017年11月24日	武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室のきもの資料を概観する展覧会。資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定、展示の設営、図録の編集・執筆、広報、関連ワークショップの運営、ギャラリートークの実施など、展覧会の全般に携わる。
6. 関西学院大学博物館 平常展「関西学院のあゆみ—新制中学部の誕生と草創期—」	2015年7月27日～2015年10月10日	関西学院大学博物館に寄贈された新制中学部にまつわる資料を展示公開した。資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定、展示の設営に学芸アシスタントとして携わる。
7. 関西学院大学博物館 特別展「愛新覚羅家の人びと—相依為命—」	2015年5月18日～2015年7月18日	関西学院大学博物館に寄贈された愛新覚羅溥儀家の資料を展示公開した。展示の設営、図録の編集、講演会の運営に学芸アシスタントとして携わる。
8. 関西学院大学博物館 特別展「蔵書票を愛した男—蒐集家原野賢吉の軌跡—」	2015年10月15日～2015年12月12日	関西学院大学博物館に寄贈された蔵書票を、コレクター原野賢吉に焦点を当て、展示公開した。資料の調査、展示内容の検討、展示資料の選定に学芸アシスタントとして携わる。

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
1 資格、免許		
1. 学芸員	2013年3月	
2 特許等		
3 実務の経験を有する者についての特記事項		

職務上の実績に関する事項		
事項	年月日	概要
3 実務の経験を有する者についての特記事項		
1. かんさい・大学ミュージアム連携 実行委員	2018年4月～	関西圏にある18の大学ミュージアム（博物館・美術館・文学館等）が連携して、大学組織の枠組みを越えた人材育成や地域貢献を行う。予算申請、報告書の作成、連携企画の実施に携わる。
4 その他		

研究業績等に関する事項				
著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
1 著書				
1. はたらく浮世絵 大日本物産図会	共	2019年12月10日	青幻舎	(pp. 24, 116, 126, 192)。橋爪節也、曾田めぐみ、中村真菜美、伊藤謙、明尾圭造、袴田舞、樋口温子。(概要)江戸～明治初期の全国各地の「生業」の様子をいきいきと描いた、浮世絵シリーズ「大日本物産図会」(三代歌川広重)、全118図を収録した初の普及版。うち染織に関わる3図(「尾張国有松絞りの図」、「下野足利辺高機之図」、「筑前国博多織之図」)の解説、および、描かれた服飾に関するコラム「ジャパン・ブルーと和洋折衷の日本」を担当し、明治初期の近代化直前の服飾と手工芸的な染織技術を紹介した。
2 学位論文				
1. 近代日本における和服の変容—西洋文化の流入に伴って—	単	2020年2月	博士論文(関西学院大学文学研究科)	明治期から昭和戦前期という和洋混淆の時代に、日本人が如何にして和服の中に西洋の文化を取り入れ、さらにそれを発展させたのかを明らかにすることを目的とし、新たな服種、模様、素材という三つの視点から検証した。新たな服種としてはトンビや二重廻しと呼ばれたケープ付外套を、模様としてはアール・ヌーヴォーをはじめとする西洋デザインを、素材としてはモスリンを取り上げた。これらの他に、機械化と合成染料による技術革新や、「きもの」「和服」という語にも西洋からの影響があったことを述べた。全てに共通して、西洋文化を引き入れようとする旺盛な意欲と、それを自国のものと同化させる柔軟さをみることができる。
2. 明治時代におけるケープ付外套の変遷—初期の「トンビ」の形状を中心に—	単	2015年3月	修士論文(関西学院大学文学研究科)	明治時代の錦絵、洋裁書、雑誌の記事や挿絵を通して、ケープ付外套の受容から日本化にいたるまでの形状および呼称の変遷を考察した。「インパネス」の語は、明治31年(1898)頃に和洋兼用の小型のケープ付コートを目指して使われ始め、この時点で「トンビ」や「二重廻し」は和服として認識されていたことが明らかになった。ケープ付外套を、西洋文化の流入に伴って創出された新たな和服として位置づける、新たな見解を提示した。
3 学術論文				
1. 明治末期における着物図案の近代性—「元禄模様」を中心に—(査読付)	単	2019年3月	『美術史』第186冊 美術史学会	(pp. 247-264)。(概要)第70回美術史学会全国大会での口頭発表の内容をまとめた。具体的な元禄模様の図案分析を通して、明治末期の着物図案における西洋文化の影響や新しい染織技術との関係を導き出した。明治時代の元禄模様においては、モチーフの内部に別のモチーフをはめ込む表現方法が多く使われていることが確認できた。明治時代の元禄模様は、厳密に元禄期のモチーフを取材し再現する方向よりも、モチーフを借用し、新たな表現を試みる方向に力が注がれていたといえよう。日本と西洋の表現が、着物図案を介して影響しあっていたことも明らかになった。
2. 明治時代の和服模様をみるアール・ヌーヴォーの影響—「ヌーボー式」の流行から「元禄模様」「光琳模様」の再生まで—(査読付)	単	2017年12月20日	『国際服飾学会誌』52号 国際服飾学会	(pp. 12-31)。(概要)国際服飾学会2016年度第2回研究会での口頭発表の内容をまとめた。和服模様にもみられるアール・ヌーヴォーの影響について、文献資料と京都工芸繊維大学所蔵の織物裂地帖から考察した。明治36年(1903)から38年(1905)頃にかけて流行する「ヌーボー式」と呼ばれた模様は、日本の伝統的なモチーフを波打たせたものであった。「ヌーボー式」と呼ばれた模様だけでなく、「元禄模様」「光琳模様」と呼ばれた和服模様にもアール・ヌーヴォーの影響があったことを指摘した。
3. 明治時代中期以降におけるケープ付外套の変遷	単	2016年3月	『美学論究』第31号 関西学院大学文学部美学研究室	(pp. 25-48)。(概要)修士論文をもとに、ケープ付外套が特に流行した、明治時代中期以降の変遷について詳しい検討を加えた。その結果、明治31年(1898)の時点で「トンビ」や「二重廻し」は和服として認識されていたことが明らかになった。ケープ付外套を、西洋文化の流入に伴って創出された新たな和服として位置づける、新たな見解を提示することができた。
4. 明治初期におけるケープ付外套の	単	2014年9月	『服飾美学』第59号 服	(pp. 21-38)。(概要)服飾美学学会平成26年度大会

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
3 学術論文				
形状について（査読付）			飾美学会	での研究発表を基に、特に明治初期におけるケープ付外套の形状について論じた。明治初期の文献や錦絵を通して考察した結果、日本では文久2年(1862)の時点ですでに筒袖の無いケープ付外套が用いられており、明治3年(1870)以降にはケープの前裾が円状になっている外套が存在したことが明らかになった。
その他				
1. 学会ゲストスピーカー				
2. 学会発表				
1. 分光測色によって見出された近代着物の色彩的特徴	共	2019年6月30日	日本繊維製品消費科学会年次大会（奈良女子大学）	古濱裕樹、樋口温子、横川公子の共同研究。ポスター発表。武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室所蔵の近代着物資料を分光測色し、色彩的特徴を探った。PANTONEの綿色票や洋服ニット地、合成染料色見本地などと比較、考察した。着物は洋服に比べ、黒、ベージュ、橙、茶が多く、白、鮮やかな赤、緑、青緑、紫が少なかった。和服の色彩には、合成染料が導入された後の近代においても一定のこだわりがあることがわかる。合成染料が使われる割合の多い色相は、緑（14.3%）、紫（25.0%）であった。
2. 明治末期から昭和戦前期のモスリン友禅図案について	単	2019年4月27日	国際服飾学会第38回大会（関西学院大学）	明治末期から大正初期のモスリン友禅図案を改めて具体的に目直し、モスリン友禅図案が縮緬とは異なる独自性を得るまでの変化を確認した。モスリンには、縮緬の図案に追従する傾向があったが、このことは、「中流以下の社会に、流行と云ふ趣味を喚起した」として高く評価されている。美術工芸的な面からは低く見られがちであった明治末期から大正初期のモスリン友禅図案が、需要者の期待に応え、大衆の日常を華やかに彩っていたことを指摘した。明治44年以降は次第に、友禅縮緬には見られない奇抜な模様があらわれはじめた。
3. 明治時代の「元禄模様」の特質—江戸時代の小袖模様との比較から—（査読付）	単	2017年5月19日	第70回美術史学会全国大会（関西学院大学上ヶ原キャンパス）	明治時代の「元禄模様」にみられた近代的な要素を、江戸時代の小袖模様と比較し明らかにした。明治時代の元禄模様では、江戸時代には単独で用いられていた網干や葵などのモチーフの中をさらに市松や弁慶縞で充填する表現がみられた。日本の染織図案にみられる近代的なデザインはこれまで大正時代を中心に論じられてきたが、明治時代後期に既に幾何学的な表現や空間的な表現があらわれていたことを示した。
4. 明治時代の和服模様にもみるアール・ヌーヴォーの影響とデザインの近代化について	単	2016年10月8日	国際服飾学会2016年度第2回研究会（京都女子大学）	和服模様にもみられるアール・ヌーヴォーの影響について、文献資料と京都工芸繊維大学所蔵の織物裂地帖から考察した。明治36年(1903)から38年(1905)頃にかけて流行する「ヌーボー式」と呼ばれた模様は、日本の伝統的なモチーフを波打たせたものであった。さらに明治38年(1905)以降流行した「元禄模様」や「光琳模様」の中にもアール・ヌーヴォーから続くモダンデザインの影響がみられた。
5. 明治初期におけるケープ付外套の受容と展開	単	2014年5月31日	服飾美学会 平成26年度大会（文化学園大学）	「トンビ」「二重廻し」「インパネス」と呼ばれるケープ付外套について、錦絵や裁縫書を用いて西洋からの受容当時の形状及び日本化にいたるまでの形状の変化を考察した。結果、日本でケープ付外套から背部のケープや筒袖が取り去られた時期が明治3年(1870)頃であったことが明らかになった。
3. 総説				
4. 芸術（建築模型等含む）・スポーツ分野の業績				
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
1. 対談録 近代着物百五十年の旅、未来へ	共	2020年7月	『薄荷 The Peppermint Magazine』vol.1	(pp.9~14) 森真琴、樋口温子、須藤綾乃。着物デザイナーの森真琴氏との近代の着物の染色技術や模様、着こなしにまつ対談。現代の技術や文化を取り入れたこれからの着物にも言及した。
2. 【展覧会報告】秋季展「粗品？粗品！—時代の空気感を映す—」	単	2020年3月	『武庫川女子大学資料館紀要』13号	pp5-9。2018年10月17日から12月5日にかけて武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室で開催された秋季展「粗品？粗品！—時代の空気感を映す—」および関連事業の総括。
3. 【展覧会図録】「ハレの日のきもの—近代の裾文様」	共	2019年9月18日	武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室	(pp.51-57)。横川公子、樋口温子、古濱裕樹、池田仁美、他。(概要) 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室のきもの資料のうち、裾文様の配されたハレ着を特集する展覧会の図録。論考「明治末期から昭和戦前期における裾模様の特質と背景」を担当した。準備室所蔵の実物資料、写真資料と

研究業績等に関する事項

著書、学術論文等の名称	単著・共著書別	発行又は発表の年月	発行所、発表雑誌等又は学会等の名称	概要
5. 報告発表・翻訳・編集・座談会・討論・発表等				
4. 【展覧会図録】「大正時代に咲いたレトロモダンな着物たち～北前船船主・大家家のファッション図鑑～」	共	2019年7月24日	大阪市住まいのミュージアム（大阪くらしの今昔館）	文献資料を併用し、近代の裾模様の特徴を検討した。その結果、近代の裾模様は、構図、モチーフ、意匠化の手法、着こなし、地質など、あらゆる面で、近代の西洋化、機械化の影響を受け、変化していたことが明らかになった。 (pp. 8-15, 17-21, 28-38, 51)。横川公子、樋口温子、深田智恵子、他。(概要) 大阪くらしの今昔館で開催された企画展の図録。大家家から同館に寄贈された大正から昭和戦前期のきもの資料を調査し、18点の資料(長着・帯)の資料解説、及び3つのコラム「華やかなおしやれ着の普及」「銘仙と紬の技術革新」「大家家の着物にみられるモダンデザイン」を担当した。大正時代を体現するきものデザインのモダンな要素を提示した。
5. 【博物館案内】武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室	単	2019年3月	『服飾美学』第65号 服飾美学会	(pp. 78-80)。(概要) 学会誌の博物館案内の連載に、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室の沿革および主要資料である近現代のきものコレクションについて記した。収集の経緯に由来する武庫川女子大学所蔵資料の特徴が、よそゆきのきものや礼装が中心で、人々の暮らしに根差した美的・生活感的こだわりを反映していること、寄贈品は商品として流通したものがほとんどであり、その意匠に時代が反映していることを紹介した。
6. 【展覧会報告】2017年度秋季展を振り返って	単	2018年12月31日	『武庫川女子大学資料館紀要』12号	(pp. 9-14)。(概要) 2017年10月18日から11月24日にかけて武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室で開催された秋季展「近現代のきものと暮らし—技術革新の成果と新しい担い手の成立—」の総括。展示内容および観覧者の反応、座談会の内容を記録し、今後の課題を提起した。座談会などを通して、思い出話を拝聴すると、きものが生活の中に息づいていた感覚が伝わってくる。記憶を呼び起こし、記録に残すことが、さらなるきもの資料の理解につながることを提案した。
7. 【展覧会図録】「粗品?粗品!—時代の空気感を映す—」	共	2018年10月17日	横川公子編、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室	(pp. 10, 18, 22, 25, 26)。横川公子、樋口温子、安藤明人、池田仁美、他。(概要) 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室の生活文化資料のうち、戦時中から現代の粗品を取り上げた展覧会の図録。章見出し「キャラクター」「暮らしの便利グッズ」「新素材と新奇なデザインの試み」「購買意欲のくすぐりとコレクターの出現」、コラム「粗品暮らし」「本物?まがい物?」を担当した。ふつうのもの、日常的なものこそ、その時代の背景や人々の憧れや感性があらわれていることを提示した。
8. 【展示紹介・口頭】「近現代のきものと暮らし—技術革新の成果と新しい担い手の成立—」展示資料にみる近代のきもの図案	単	2017年11月18日	服飾美学会平成29年度第一回研究会(武庫川女子大学)	服飾美学会での展覧会見学の事前展示説明会。学芸員として携わった武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室での展覧会「近現代のきものと暮らし—技術革新の成果と新しい担い手の成立—」の全体の構成、および出展資料にみられる近代のきもの図案の特徴、さらに訪問者の成立の背景などを紹介し、展示への理解を促した。
9. 【展覧会図録】「近現代のきものと暮らし—技術革新の成果と新しい担い手の成立—」	共	2017年10月18日	横川公子編、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室	(pp. 15, 21, 52-55)。横川公子、樋口温子、村田裕子、池田仁美、他。(概要) 武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室のきもの資料を概観する展覧会の図録。章見出し「西洋へのあこがれ」「伝統回帰」、論考「近代のきもの図案—西洋デザインの導入と伝統回帰—」を担当した。論考では、武庫川女子大学附属総合ミュージアム設置準備室所蔵の近現代のきもの資料にみられる西洋風の模様のきものと伝統復古模様のきものをそれぞれ整理・分類した上で、伝統回帰の現象と西洋文化の導入が無関係ではなく、むしろ伝統回帰は西洋文化を媒介しての自己発見であったことを、文献を併用して示した。
6. 研究費の取得状況				

学会及び社会における活動等

年月日	事項
1. 2018年～現在	服飾美学会 幹事
2. 2018年～現在	日本風俗史学会 正会員
3. 2018年～現在	かんさい・大学ミュージアム連携 実行委員
4. 2017年	美術史学会 全国大会幹事
5. 2015年～現在	国際服飾学会 正会員
6. 2013年～現在	服飾美学会 正会員
7. 2013年～現在	美術史学会 正会員